

# 日々の保育の中で子ども達の表現をより豊かにするためには

## ～ 手遊びという一つの手段から、豊かな表現を引き出す工夫 ～

地区別研究大会

東部地区

おひさま保育園 かき道ピノキオ保育園 教宗寺保育園  
つばさ保育園 戸石保育園 TONTON 輝保育園  
日見保育園 ひよこ保育園 放光保育園 結宅保育園

### 1. 動機

まず私達の研究は、「表現とは何か・・・」というところからスタートし、10ヶ園の保育士にアンケートをとり、“表現”に対する意識調査を行った。全ての意見をまとめると、“表現”とは、喜怒哀楽や思考といった内面的なものを自分らしく表すものだとして理解していることが分かった。また、表現あそびをイメージさせるものの一つとして、まず“手遊び”を挙げる保育士が多く、子どもにとっても、保育士にとっても、“手遊び”というものが一番身近な表現活動だということに気付いた。そこで、研究テーマを“手遊び”に絞り、子どもの表現力について研究を進めていくこととした。

### 2. 目的

現段階での子ども達の表現力を知り、どのようにして表現力が豊かになっていくのかを学ぶことを目的とした。

### 3. 実践

#### i) 手遊びとは

手遊びとは、いつでもどこでも手軽に楽しむことができるものであり、日常の保育の中でも多く取り入れられている身近な表現活動である。普段何気なく使っている手遊びであるが、実は様々な効果が盛り込まれている。主に集中力が高まり、想像力・発想力が広がる効果がある。また、コミュニケーションがとれ、子どもとの絆・信頼感・安心感を培うことができ、さらに子どもの心理状態がより安定することにより、これらの効果をより高めることができると言われている。

#### ii) 『トントンアンパンマン』の実践

現段階での子ども達の表現力を知る上で、10ヶ園の保育士と子どもが共通したテーマで実践をする必要があったので、どの園でも知られているトントンアンパンマンを題材として、子ども達が手遊びをする姿を一週間観察した。観察した結果、年齢によって以下のような変化が見られた。

0・1歳児では、保育士の動作に興味を示し、見つめ、真似をして楽しむ姿がどの園でも共通していた。しかし、毎日同じ調子で続けていると興味が薄れてきているようにも感じられた。

2歳児では、生活の様々な場面でフレーズを口ずさんだり、友達同士で楽しむ姿や、それに関連した別の手遊びをリクエストする姿、保育者が間違えると正しい動きやフレーズを指摘する姿など、意欲や観察力といったキーワードが共通してでてきた。

3・4・5歳児では、回数を重ねていくことで子ども同士で楽しむ姿がみられるようになった。新しいキャラクターを取り入れてアレンジしようと保育者に提案してくる姿もあり、実際に、話し合っ

ジョンを作るところまで発展した園もあった。また、表情や声の大きさと興味の示し方が異なり、早口になるとより高揚感が高まるという傾向もみられた。4・5歳児の男の子は、アンパンマンに対して「幼い」や「照れ」といった感情もあったようだった。

以上のように、トントンアンパンマンという手遊びを行う10ヶ園の子ども達の姿から、年齢に応じて興味・意欲・観察力・提案・工夫といったキーワードが挙がった。保育所保育指針とこれらのキーワードを照らし合わせると、発達段階の特徴を示しているものだと分かった。

### iii) 『だんご』の実践

より子どもの表現力を観察するために、アンパンマンとは逆に、10ヶ園中9ヶ園が知らない手遊びを選び、初めて目にして耳にするところからの姿を観察した。観察ポイントも絞るために書式を統一して実践記録をつけた。日替わりで保育者の表現方法に変化をつけて実践してみたところ、「表情の変化」と「表現の変化」に分けて分析することができた。

「表情の変化」では、こちらが笑顔でいる時と無表情でいる時とで、どの年齢も「安心」と「不安」というキーワードに分かれた。こちらが笑顔やオーバーに表現した場合、ノリも良く、初めての手遊びに対して食いつきも良かったという姿が大半であった。一方、無表情で動きも小さくすると、神妙な顔でじっと見つめたり、戸惑った表情を見せたり、動きもなくなっていくなど、不安に感じる姿が共通していた。4・5歳になると、無表情が逆に面白いと感じていたずらな顔をして笑うというところもあった。

このように、保育者の表情が明るい暗いというだけでも、子ども達の気持ちの揺れは大きく、その後の表現したいという気持ちが高まるかそうでなくなるかという積極性にも関わってくるということが分かった。

「表現の変化」では、こちらが抑揚をつけたり、間とテンポを意識して行うことで、先ほど述べた積極性の延長線に向かっていくことも分かった。積極的に表現することで、あーしたい、こうしたい、次は〇〇、もっと〇〇のようなクリエイティブな感性が見出されるということである。団子が頭にくっついて取れないというシンプルなものであるが、身体の色々な部位につけようと発展したり、スピードアップしてゲーム感覚で楽しんだりするところも多く、各園で様々なバリエーションができた。なかには、なかなか取れない団子に対して、「つまようじで取ればとれたよ。」という愉快な世界観も生み出され、この実践をきっかけにどの園でも大好きな手遊びになった。

### iv) 講師 松川先生の講話と実技指導

アンパンマンと団子の手遊びを通して、子どもの表現力がより豊かになるには、保育者自身の表現力が大きく関係しているということに改めて気付くことができた。研究を進めるにあたり、着眼点を「子ども」から「保育者」に移し、私たち自身の表現力を知り、それをより高めるための方法を学ぶことにした。

講師は、長崎純心大学客員教授・長崎県音楽連盟理事長の松川暢男先生である。

松川先生の講話において、まず仰ったことは「言葉の重要性」である。子どもを取り巻く環境の中で最も日々触れるものが言葉である。その言葉をいかに保育者が大切に、表現豊かに伝えていくかによって、子どもひとり一人の表現力に違いが出てくるのである。その”言葉“を発するうえで3つのポイントがある。1つ目は「機械的な言葉かけにならないようにすること」である。ここで松川先生は”母乳語“という言葉を用いた。母乳語とは、母親が乳児に対して無意識に言葉かけするような、微笑みながら抑揚を大きくし、ゆっくりと丁寧に伝える言葉のことを指す。保育の現場においてもこの母乳語を用いて伝えることで、より子どもの心が豊かになっていくとお話いただいた。2つ目のポイントは「一人ひとりの子どもが自分に言われているように伝えること」である。全体に話している時にも、一人ひとりの子どもを意

識して話していくことが大切である。

3つ目のポイントは「一つひとつの言葉には魂があることを意識すること」である。言葉が持つ性質や意味を保育者がよく理解したうえで、イントネーションや言い方、抑揚などを変えていくことで、より子どもたちが直感的にイメージしやすくなる。何のためにその言葉を使うのか、どんなイメージで話すのかを常に意識して言葉を使うことで、一人ひとりの子どもの心に届く言葉となる。

松川先生の講話を踏まえたうえで、手遊びの実践を行った。実践方法は、5歳児20名の前で保育士が手遊びを行い、それに対して助言を頂いた。手遊びは、一人一つずつ好きなものを選んだ。各手遊びの実践を通して、「発音の仕方」と「言葉の広がり」を大切にしながら行うようにとの助言を受けた。子どもたちのイメージが湧きやすいように身振り、手振りによる表現も必要であるが、まずは言葉を意識して行うことが大切であると学んだ。

#### ロ) 子どもの表現力の変化の観察（動画撮影）

松川先生の講話と実技指導で学んだことを活かし、各保育園で実践・動画撮影を行って子ども達の様子を観察した。しかし、対象年齢や実践方法、発達段階などが違い、比較しにくいという問題点があり、対象園を1ヶ園に絞って動画撮影を行い、子どもたちの表現力の変化を観察していった。

期間が4ヶ月と短かったため、顕著な変化ははっきりとは見られませんでした。その中でも、子どもたちが徐々にこの手遊びのことを好きになり、食いついてくれるようになってくれました。さらに、手遊びを通して、笑顔になる時間が増えました。この実践を通して、たった一つの手遊びに対しても、様々な工夫や意識をしていくことでよりよい保育につながることを改めて痛感しました。日々の言葉掛けや手遊び、気配りなどに対してもすべてが子どもの成長に寄与することを意識しながら、保育を行っていこうと思います。

#### 4. 考察

これまでの研究を通して、子どもたちにとっての手遊びの在り方に気づくことができた。

0・1歳児では、人に対する基本的な信頼感が育っていく時期である。ここでの手遊びは、愛情表現が中心であり、情緒の安定につながる大切な表現活動である。

2歳児は、リズムカルな運動や音楽に合わせて体を動かしたり歌ったりすることを好むようになる時期。ここでの手遊びは、表現の喜びやその芽生えを育てるための大切な表現活動である。

3・4・5歳児では、遊びをいかに面白くするか、もっと発展させていくか、子どもたちが自ら工夫していく中に、クリエイティブな感性が息づいていく時期。ここでの手遊びは、子どもたちが生き生きと自分を表現し、友達とのつながりを深め、より豊かな感性を育てるきっかけとなる大切な表現活動である。

以上のように、手遊びには、子どもの発達を促す要素が沢山詰まっているということが分かった。子ども達の表現をより豊かなものにするためには、私たち保育者の感性が豊かであり、“本物の言葉”で子ども達と向き合う事が大切であるとわかった。そして、手遊びのような小さな表現活動の積み重ねが大事で、それによって「表現したい」という表現力の根っこの部分がしっかりと育っていくのではないかと考えた。

#### 5. 課題

普段何気なく保育の中で使っている”手遊び”。活動の導入であったり、こちらに注目してほしい時など、子どもたちをまとめるために使う手段として用いられがちであるが、一つひとつの手遊びに面白さがあり、子どもたちの心・体・脳が豊かになるための要素が沢山盛り込まれている。たとえ導入の一つであっても、そのやりとりの一瞬一瞬を大切に、言葉の一つひとつを大切に表現する楽しさや喜びを共有することで、手遊びの在り方は大きく変わり、子どもの豊かな表現力が育つきっかけとなる大切な表現活動となる。

赤ちゃんの頃から親しんできた手遊びでの楽しさや喜びが、その後の歌やお遊戯、オペレッタ、劇遊び、絵画活動などすべての表現活動に生きてくることを願いながら、今回の研究で得た学びを日々の保育に活かしていきたいと思う。